

一握の砂

石川啄木

函館なる郁雨宮崎大四郎君

同国の友文学士花明金田一京助君

この集を両君に捧ぐ。予はすでに予のすべてを両君の前に示しつくしたるものの如し。従つて両君はここに歌はれたる歌の一一につきて最も多く知るの人なるを信ずればなり。

また一本をとりて亡児真一に手向く。この集の稿本を書肆の手に渡したるは汝の生れたる朝なりき。この集の稿料は汝の薬餌となりたり。而してこの集の見本刷を予の閲したるは汝の火葬の夜なりき。

著者

明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。集中五章、感興の来由するところ相邇（ちか）きをたづ

ねて仮にわかてるのみ。「秋風のこころよさに」は明治四十一年秋の記念なり。

我を愛する歌

東海（とうかい）の小島（こじま）の磯（いそ）の白砂（しろすな）に  
われ泣（な）きぬれて  
蟹（かに）とたはむる

頬（ほ）につたふ  
なみだのごはず  
一握（いちあく）の砂（すな）を示（しめ）しし人を  
忘れず

大海（だいかい）にむかひて一人（ひとり）  
七八日（ななやうか）  
泣（な）きなむとすと家（い）を出（い）でにき

いたく錆（さ）びしピストル出（い）でぬ



父と母	燈影（ほかげ）なき室（しつ）に我あり		かなしくもあるか	泣く母の肖顔（にがほ）つくりぬ	ひと塊（くれ）の土に涎（よだれ）し		母よ咎（とが）むな	かなしき癖ぞ	ぬ児の癖（くせ）は	目さまして猶（なほ）起（お）き出（い）で	死ぬことをやめて帰り来（きた）れり	砂に書き	大（だい）という字を百あまり	なみだは重きものにしあるかな	なみだを吸（す）へる砂の玉	しつとりと
-----	--------------------	--	----------	-----------------	-------------------	--	-----------	--------	-----------	----------------------	-------------------	------	----------------	----------------	---------------	-------

壁のなかより杖（つゑ）つきて出（い）づ

たはむれに母を背負（せお）ひて

そのあまり軽（かる）きに泣きて

三歩あゆまず

飄然（へうぜん）と家を出（い）でては

飄然と帰りし癖よ

友はわらへど

ふるさとの父の咳（せき）する度（たび）に

斯（か）く

咳の出（い）づるや

病（や）めばはかなし

わが泣くを少女等（をとめら）きかば

病犬（やまいぬ）の

月に吠（ほ）ゆるに似たりといふらむ

何処（いづく）やらむかすかに虫のなくごと

き

こころ細（ぼそ）さを

今日（けふ）もおぼゆる

いと暗き

穴（あな）に心を吸（す）はれゆくごとく思

ひて

つかれて眠る

こころよく

我にはたらく仕事あれ

それを仕遂（しと）げて死なむと思ふ

こみ合（あ）へる電車の隅（すみ）に

ちぢこまる

ゆふべゆふべの我のいとしさ

浅草（あさくさ）の夜（よ）のにぎはひに

まぎれ入（い）り

まぎれ出（い）で来（き）しさびしき心

愛犬（あいけん）の耳斬（き）りてみぬ

あはれこれも

物に倦（う）みたる心にかあらむ

鏡（かがみ）とり

能（あた）ふかぎりのさまさまの顔をしてみ

ぬ

泣き飽（あ）きし時

なみだなみだ

不思議なるかな

それをもて洗（あら）へば心戯（おど）けた

くなれり

呆（あき）れたる母の言葉に

気がつけば

茶碗（ちやわん）を箸（はし）もて敲（たた

きてありき







九百九十九（くひやくくじふく）割りて死な  
まし

いつも逢（あ）ふ電車の中の小男（こをとこ  
の

稜（かど）ある眼（まなこ）  
このごろ気になる

鏡屋（かがみや）の前に来て

ふと驚きぬ

見すぼらしげに歩（あゆ）むものかも

何（なに）となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下（お）りしに

ゆくところなし

空家（あきや）に入（い）り

煙草（たばこ）のみたることありき

あはれたただ一人居（い）たきばかりに



思ふことなしに

腕（うで）拱（く）みて

このごろ思ふ

大（おほ）いなる敵（てき）目の前に躍（を  
ど）り出（い）でよと

手が白く

且（か）つ大（だい）なりき

非凡（ひぼん）なる人といはるる男に会ひし

に

こころよく

人を讚（ほ）めてみたくなりけり

利己（りこ）の心に倦（う）めるさびしさ

雨降れば

わが家（いへ）の人誰（たれ）も誰も沈める

顔す

雨霽（は）れよかし

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

この日頃

ひそかに胸にやどりたる悔（くい）あり

われを笑はしめざり

へつらひを聞けば

腹立（はらだ）つわがこころ

あまりに我を知るがかなしき

知らぬ家（いへ）たたき起して

遁（に）げ来（く）るがおもしろかりし

昔の恋しさ

非凡（ひぼん）なる人のごとくにふるまへる

後（のち）のさびしさは

何（なに）にかたぐへむ

へり	持薬（ぢやく）をのむがごとくにも我はおも	死ぬことを	欲（ほ）しくなりたり	その気がするさを	それもよしこれもよしとてある人の	なみだ流るる	うなだれてある故（ゆるゑ）やらむ	遠くより笛の音（ね）きこゆ	金借りにけり	我を見る人に	実務には役に立たざるうた人（びと）と	憎（にく）かりき	その前にゆきて物を言ふ時	大（おほ）いなる彼の身体（からだ）が
----	----------------------	-------	------------	----------	------------------	--------	------------------	---------------	--------	--------	--------------------	----------	--------------	--------------------

心いためば

路傍（みちばた）に犬ながながと吠呻（あく  
び）しぬ

われも真似（まね）しぬ

うらやましさに

真剣になりて竹もて犬を撃（う）つ

小児（せうに）の顔を

よしと思へり

ダイナモの

重き唸（うな）りのこちよさよ

あはれこのごとく物を言はまし

剽軽（へうきん）の性（さが）なりし友の死

顔の

青き疲れが

いまも目にあり







は	な	れ	ば	な	れ	の	心	も	て	静	か	に	対	（	む	か	）	ふ	
気	ま	づ	き	や	何	（	な	）	ぞ										
か	の	船	の																
か	の	航	海	の	船	客	（	せ	ん	か	く	）	の	一	人	に	て	あ	り
き																			
死	に	か	ね	た	る	は													
目	の	前	の	菓	子	皿	（	く	わ	し	ざ	ら	）	な	ど	を			
か	り	か	り	と	嘸	（	か	）	み	て	み	た	く	な	り	ぬ			
も	ど	か	し	き	か	な													
よ	く	笑	ふ	若	き	男	の												
死	に	た	ら	ば															
す	こ	し	は	こ	の	世	さ	び	し	く	も	な	れ						
何	が	な	し	に															
息	（	い	き	）	き	れ	る	ま	で	駆	（	か	）	け	出	（	だ	）	し
て	み	た	く	な	り	た	り												
草	原	（	く	さ	は	ら	）	な	ど	を									

あたらしき背広など着て  
旅をせむ  
しかく今年（ことし）も思ひ過ぎたる  
ことさらに燈火（ともしび）を消して  
まぢまぢと思ひてるしは  
わけもなきこと  
浅草の凌雲閣（りょううんかく）のいただき  
に  
腕組みし日の  
長き日記（にき）かな  
尋常（じんじやう）のおどけならむや  
ナイフ持ち死ぬまねをする  
その顔その顔  
こそこその話がやがて高くなり  
ピストル鳴りて

人生終る

時ありて

子供のやうにたはむれす

恋ある人のなさぬ業（わざ）かな

とかくして家を出（い）づれば

日光のあたたかさあり

息ふかく吸ふ

つかれたる牛のよだれは

たらたらと

千万年も尽きざるごとし

路傍（みちばた）の切石（きりいし）の上に

腕拱（く）みて

空を見上ぐる男ありたり

何やらむ

穩（おだや）かならぬ目付（めつき）して

鶴嘴（つるはし）を打つ群を見てゐる

心より今日（けふ）は逃げ去れり

病（やまひ）ある獣（けもの）のごとき

不平逃げ去れり

おほどかの心来れり

あるくにも

腹に力のたまるがごとし

ただひとり泣かまほしさに

来て寝たる

宿屋（やどや）の夜具（やぐ）のこころよさ

かな

友よさは

乞食（こじき）の卑（いや）しさ厭（いと）

ふなかれ

餓（う）ゑたる時は我も爾（しか）りき





ぢつと手を見る

何もかも行末（ゆくすゑ）の事みゆるごとき  
このかなしみは

拭（ぬぐ）ひあへずも

とある日に

酒をのみたくてならぬごとく

今日（けふ）われ切（せち）に金（かね）を  
欲（ほ）りせり

水晶（すゐしやう）の玉をよろこびもてあそ  
ぶ

わがこの心

何（なに）の心ぞ

事もなく

且（か）つころよく肥（こ）えてゆく

わがこのごろの物足らぬかな



大いなる水晶の玉を

ひとつ欲（ほ）し

それにむかひて物を思はむ

うぬ惚（ぼ）るる友に

合槌（あひづち）うちてゐぬ

施与（ほどこし）をするごとき心に

ある朝のかなしき夢のさめぎはに

鼻に入（い）り来（き）し

味噌（みそ）を煮（に）る香（か）よ

こつこつと空地（あきち）に石をきざむ音

耳につき来（き）ぬ

家（いへ）に入（い）るまで

何がなしに

頭（あたま）のなかに崖（がけ）ありて

日毎（ひごと）に土のくづるごとし

遠方（ゑんぱう）に電話の鈴（りん）の鳴る	ごとく	今日（けふ）も耳鳴る	かなしき日かな	垢（あか）じみし袷（あはせ）の襟（えり）	よ	かなしくも	ふるさとの胡桃（くるみ）焼（や）くるにほ	ひす		死にたくてならぬ時あり	はばかりに人目を避（さ）けて	怖（こは）き顔する	一隊の兵を見送りて	かなしかり	何（なに）ぞ彼等のうれひ無（な）げなる	邦人（くにびと）の顔たへがたく卑（いや）
----------------------	-----	------------	---------	----------------------	---	-------	----------------------	----	--	-------------	----------------	-----------	-----------	-------	---------------------	----------------------

しげに

目にうつる日なり

家にこもらむ

この次の休日（やすみ）に一日寝てみむと

思ひすごしぬ

三年（みとせ）このかた

或る時のわれのころを

焼きたての

麵麩（ばん）に似たりと思ひけるかな

たんたらたらたんたらと

雨滴（あまだれ）が

痛むあたまにひびくかなしさ

ある日のこと

室（へや）の障子（しやうじ）をはりかへぬ

その日はそれにて心なごみき



いつも睨（にら）むラムプに飽（あ）きて  
三日（みか）ばかり  
蝋燭（らふそく）の火にしたしめるかな  
人間のつかはぬ言葉  
ひよっとして  
われのみ知れるごとく思ふ日  
あたらしき心もとめて  
名も知らぬ  
街など今日（けふ）もさまよひて来（き）ぬ  
友がみなわれよりえらく見ゆる日よ  
花を買ひ来（き）て  
妻（つま）としたしむ  
何（なに）すれば  
此处（ここ）に我ありや  
時にかく打驚（うちおどろ）きて室（へや）

を眺むる

人ありて電車のなかに唾（つば）を吐（は）  
く

それにも

心いたまむとしき

夜明けまであそびてくらす場所が欲（ほ）し  
家（いへ）をおもへば  
こころ冷（つめ）たし

人みなが家（いへ）を持ってふかなしみよ  
墓に入（い）るごとく  
かへりて眠る

何かひとつ不思議を示し  
人みなのおどろくひまに  
消えむと思ふ

人といふ人のところに

一人づつ囚人（しうじん）がゐて  
うめくかなしさ  
叱（しか）られて  
わっと泣き出（だ）す子供心  
その心にもなりてみたきかな  
盗むてふことさへ悪（あ）しと思ひえぬ  
心はかなし  
かくれ家（が）もなし  
放（はな）たれし女のごときかなしみを  
よわき男の  
感（かん）ずる日なり  
庭石（にはいし）に  
はたと時計をなげうてる  
昔のわれの怒（いか）りいとしも  
顔あかめ怒（いか）りしことが





かるがゆゑにや秋が身に沁（し）む

わが抱（いだ）く思想はすべて

金（かね）なきに因（いん）するごとし

秋の風吹く

くだらない小説を書きてよろこべる

男憐（あは）れなり

初秋（はつあき）の風

秋の風

今日（けふ）よりは彼（か）のふやけたる男  
に

口を利（き）かじと思ふ

はても見えぬ

真直（ますぐ）の街をあゆむごとき

こころを今日は持ちえたるかな

何事も思ふことなく

いそがしく

暮らせし一日（ひとひ）を忘れじと思ふ

何事も金金（かねかね）とわらひ

すこし経（へ）て

またも俄（には）かに不平つのもり来（く）

誰（た）そ我（われ）に

ピストルにても撃（う）てよかし

伊藤のごとく死にて見せなむ

やとばかり

桂（かつら）首相に手とられし夢みて覚（さ）

めぬ

秋の夜の二時

煙

一

病（やまひ）のごと

思郷（しきやう）のこころ湧（わ）く日なり  
目にあをぞらの煙（けむり）かなしも

己（おの）が名をほのかに呼びて

涙せし

十四（じふし）の春にかへる術（すべ）なし

青空に消えゆく煙

さびしくも消えゆく煙

われにし似るか

かの旅の汽車の車掌（しやしやう）が

ゆくりなくも

我が中学の友なりしかな

ほとばしる唧筒（ポンプ）の水の

心地（ここち）よさよ

しばしは若きころもて見る

師も友も知らで責（せ）めにき

謎（なぞ）に似る

わが学業のおこたりの因（もと）

教室の窓より遁（に）げて

ただ一人

かの城址（しろあと）に寝に行きしかな

不来方（こずかた）のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五（じふご）の心

かなしみといはばいふべき

物の味（あぢ）

我の嘗（な）めしはあまりに早かり

晴れし空仰（あふ）げばいつも

口笛を吹きたくなりて

吹きてあそびき

夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり

よく叱（しか）る師ありき

髯（ひげ）の似たるより山羊（やぎ）と名づ  
けて

口真似もしき

われと共（とも）に

小鳥に石を投げて遊ぶ

後備大尉（こうびたいゐ）の子もありしかな

城址（しろあと）の

石に腰掛（こしか）け

禁制の木（こ）の実（み）をひとり味（あぢ  
は）ひしこと

その後（のち）に我を捨てし友も

あの頃は共に書読（ふみよ）み

ともに遊びき

学校の図書館（としよぐら）の裏の秋の草

黄（き）なる花咲きし

今も名知らず

花散れば

先（ま）づ人さきに白の服（ふく）着（き）  
て家（いへ）出（い）づる

我にてありしか

今は亡き姉の恋人のおとうとと

なかよくせしを

かなしと思ふ

夏休み果（は）ててそのまま

かへり来（こ）ぬ

若き英語の教師もありき

ストライキ思ひ出（い）でて

今は早（は）や吾が血躍（をど）らず  
ひそかに淋（さび）し

盛岡（もりをか）の中学校の

露台（バルコン）の

欄干（てすり）に最一度（もいちど）我を倚  
（よ）らしめ

神有りと言ひ張る友を

説（と）きふせし

かの路傍（みちばた）の栗（くり）の樹（き）  
の下（もと）

西風に

内丸大路（うちまるおほぢ）の桜の葉  
かさこそ散るを踏（ふ）みてあそびき

そのかみの愛読の書（しよ）よ

大方（おほかた）は

今は流行（はや）らずなりにけるかな

石ひとつ

坂をくだるがごとくにも

我けふの日に到り着きたる

愁（うれ）ひある少年（せうねん）の眼に羨

（うらや）みき

小鳥の飛ぶを

飛びてうたふを

解剖（ふわけ）せし

蚯蚓（みみず）のいのちもかなしかり

かの校庭の木柵（もくさく）の下（もと）

かぎりなき知識の慾（よく）に燃ゆる眼を

姉は傷（いた）みき

人恋ふるかと

蘇峯（そほう）の書（しよ）を我に薦（すす

めし友早く



校（かう）を退（しりぞ）きぬ  
まづしさのため

おどけたる手つきをかしと

我のみはいつも笑ひき

博学の師を

自（し）が才（さい）に身をあやまちし人の  
こと

かたりきかせし

師もありしかな

そのかみの学校一のなまけ者

今は真面目（まじめ）に

はたらきて居（を）り

田舎（ゐなか）めく旅の姿を

三日（みか）ばかり都に曝（さら）し

かへる友かな

茨島（ばらじま）の松の並木の街道を

われと行きし少女（をとめ）

才（さい）をたのみき

眼を病みて黒き眼鏡（めがね）をかけし頃

その頃よ

一人泣くをおぼえし

わがこころ

けふもひそかに泣かむとす

友みな己（おの）が道をあゆめり

先（さき）んじて恋のあまさと

かなしさを知りし我なり

先んじて老（お）ゆ

興（きよう）来（きた）れば

友なみだ垂（た）れ手を揮（ふ）りて

酔漢（ゑひどれ）のごとくなりて語りき

人ごみの中をわけ来（く）る

わが友の

むかしながらの太（ふと）き杖（つゑ）かな

見よげなる年賀の文（ふみ）を書く人と

おもひ過ぎにき

三年（みとせ）ばかりは

夢さめてふつと悲しむ

わが眠り

昔のごとく安からぬかな

そのむかし秀才（しうさい）の名の高かりし

友牢（らう）にあり

秋のかぜ吹く

近眼（ちかめ）にて

おどけし歌をよみ出（い）でし

茂雄（しげを）の恋もかなしかりしか

わが妻のむかしの願ひ  
音楽のことにかかりき

今はうたはず

友はみな或日（あるひ）四方（しほう）に散

り行（ゆ）きぬ

その後（のち）八年（やとせ）

名（な）挙（あ）げしもなし

わが恋を

はじめて友にうち明けし夜（よる）のことな

ど

思ひ出（い）づる日

糸切れし紙鳶（たこ）のごとくに

若き日の心かろくも

とびさりしかな

二

ふるさとの訛（なまり）なつかし	停車場（ていしやば）の人ごみの中に	それを聴（き）きにゆく		やまひある獣（けもの）のごとき	わがこころ	ふるさとのこと聞けばおとなし		ふと思ふ	ふるさとにゐて日毎（ひごと）聴（き）きし		雀（すずめ）の鳴くを	三年（みとせ）聴かざり		亡（な）くなれる師がその昔	たまひたる	地理の本など取りいでて見る		その昔	小学校の桎屋根（まさやね）に我が投げし鞆	（まり）
-----------------	-------------------	-------------	--	-----------------	-------	----------------	--	------	----------------------	--	------------	-------------	--	---------------	-------	---------------	--	-----	----------------------	------

いかにかなりけむ

ふるさとの

かの路傍（みちばた）のすて石よ

今年も草に埋（うづ）もれしらむ

わかれをれば妹（いもと）いとしも

赤き緒（を）の

下駄（げた）など欲（ほ）しとわめく子なり  
し

二日（ふつか）前に山の絵（ゑ）見しが

今朝（けさ）になりて

にはかに恋しふるさとの山

飴売（あめうり）のチャルメラ聴（き）けば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

このごろは

母も時時（ときどき）ふるさとのことと言ひ	出（い）づ	秋に入（い）れるなり	それとなく	郷里（くに）のことなど語り出（い）でて	秋の夜（よ）に焼く餅（もち）のにほひかな		かにかくに渋民村（しぶたみむら）は恋しか	り		おもひでの山	おもひでの川		田も畑（はた）も売りて酒のみ	ほろびゆくふるさと人（びと）に	心寄する日		あはれかの我の教へし	子等（こら）もまた	やがてふるさとを棄（す）てて出（い）づる
----------------------	-------	------------	-------	---------------------	----------------------	--	----------------------	---	--	--------	--------	--	----------------	-----------------	-------	--	------------	-----------	----------------------





夜（よる）も書（ふみ）読（よ）む	かなし	不具（かたは）の父もてる三太（さんた）は	うすのろの兄と		女を思ふ	衣（きぬ）貸（か）さむ踊れと言ひし	ある年の盆（ぼん）の祭に		わが旅にしてなせしごとくに		子を挙（あ）げぬ	し	千代治等（ちよぢら）も長（ちやう）じて恋		木賃宿（きちんやど）かな		友のいとなむ	小学の首席を我と争（あらし）ひし		間もなく死にし男もありき	肺（はい）病（や）みて
------------------	-----	----------------------	---------	--	------	-------------------	--------------	--	---------------	--	----------	---	----------------------	--	--------------	--	--------	------------------	--	--------------	-------------



極道地主（ごくだうぢぬし）の総領（そうり	やう）の	よめとりの日の春の雷（らい）かな			宗次郎（そうじろ）に	おかねが泣きて口説（くど）き居（を）り	大根（だいこん）の花白きゆふぐれ			小心（せうしん）の役場の書記の	気の狂（ふ）れし噂（うはさ）に立てる		ふるさとの秋			わが従兄（いとこ）	野山の獵（かり）に飽（あ）きし後（のち）	酒のみ家（いへ）売り病（や）みて死にしか	な			我ゆきて手をとれば	泣きてしづまりき	酔（ゑ）ひて荒（あば）れしそのかみの友
----------------------	------	------------------	--	--	------------	---------------------	------------------	--	--	-----------------	--------------------	--	--------	--	--	-----------	----------------------	----------------------	---	--	--	-----------	----------	---------------------

酒のめば

刀（かたな）をぬきて妻を逐（お）ふ教師（  
けうし）もありき

村を逐（お）はれき

年ごとに肺病（はいびやう）やみの殖（ふ）

えてゆく

村に迎へし

若き医者かな

ほたる狩（がり）

川にゆかむといふ我を

山路（やまぢ）にさそふ人にてありき

馬鈴薯（ばれいしよ）のうす紫の花に降（ふ）  
る

雨を思へり

都（みやこ）の雨に



わがために	なやめる魂（たま）をしづめよと	讚美歌うたふ人ありしかな		あはれかの男のごときたましひよ	今は何処（いづこ）に	何を思ふや		わが庭の白き躑躅（つつじ）を		薄月（うすづき）の夜（よ）に	折（を）りゆきしことな忘れそ		わが村に	初めてイエス・クリストの道を説（と）きた	る	若き女かな		霧ふかき好摩（かうま）の原（はら）の	停車場の
-------	-----------------	--------------	--	-----------------	------------	-------	--	----------------	--	----------------	----------------	--	------	----------------------	---	-------	--	--------------------	------

朝の虫こそすずろなりけれ

汽車の窓

はるかに北にふるさとの山見え来（く）れば  
襟（えり）を正（ただ）すも

ふるさとの土をわが踏めば

何がなしに足軽（かる）くなり

心重（おも）れり

ふるさとに入（い）りて先（ま）づ心傷（い

た）むかな

道広くなり

橋もあたらし

見もしらぬ女教師（をんなけうし）が

そのかみの

わが学舎（まなびや）の窓に立てるかな

かの家（いへ）のかの窓にこそ

春の夜（よ）を

秀子（ひでこ）とともに蛙（かはづ）聴（き）  
きけれ

そのかみの神童（しんどう）の名の

かなしさよ

ふるさとに来て泣くはそのこと

ふるさとの停車場路（ていしやばみち）の

川ばたの

胡桃（くるみ）の下に小石拾（ひろ）へり

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

秋風のころよさに

ふるさとの空遠（とほ）みかも

高（たか）き屋（や）にひとりぼりて



愁（うれ）ひて下（くだ）る

皎（かう）として玉をあざむく小人（せうじ  
ん）も

秋（あき）来（く）といふに  
物を思へり

かなしきは

秋風ぞかし

稀（まれ）にのみ湧（わ）きし涙の繁（しじ

に流るる

青に透（す）く

かなしみの玉に枕（まくら）して

松のひびきを夜もすがら聴（き）く

神寂（さ）びし七山（ななやま）の杉

火のごとく染めて日入（い）りぬ

静かなるかな

名も知らぬ鳥啄（ついで）めり赤き茨（ばら	丘にのぼれば	愁（うれ）ひ来て		思ひことごと新しくなる	洗（あら）はれて	秋立つは水にかも似る		秋雨（あきさめ）の後（のち）	暮れゆく空とくれなるの紐（ひも）を浮べぬ	水潦（みづたまり）		とりあつめたる悲しみの日は	暮れゆきぬ	ものなべてうらはかなげに		いにしへ人（びと）の心よろしも	ける	愁（うれ）ひ知るといふ書（ふみ）焚（た）	そを読めば
----------------------	--------	----------	--	-------------	----------	------------	--	----------------	----------------------	-----------	--	---------------	-------	--------------	--	-----------------	----	----------------------	-------

の実（み）

秋の辻（つじ）

四（よ）すぢの路（みち）の三すぢへと吹き

ゆく風の

あと見えずかも

秋の声まづいち早く耳に入（い）る

かかる性（さが）持つ

かなしむべかり

目になれし山にはあれど

秋来（く）れば

神や住まむとかしこみて見る

わが為（な）さむこと世に尽（つ）きて

長き日を

かくしもあはれ物を思ふか

さらさらさらと雨落ち来（きた）り

庭の面（も）の濡（ぬ）れゆくを見て  
 涙わすれぬ

ふるさとの寺の御廊（みらう）に

踏（ふ）みにける

小櫛（をぐし）の蝶（てふ）を夢にみしかな

こころみに

いとけなき日の我となり

物言ひてみむ人あれと思ふ

はたはたと黍（きび）の葉鳴れる

ふるさとの軒端（のきば）なつかし

秋風吹けば

摩（す）れあへる肩のひまより

はつかにも見きといふさへ

日記（にき）に残れり

風流男（みやびを）は今も昔も

泡雪（あわゆき）の

玉手（たまで）さし捲（ま）く夜（よ）にし

老（お）ゆらし

かりそめに忘れても見まし

石だたみ

春生（お）ふる草に埋（うも）るるがごと

その昔揺籃（ゆりかご）に寝て

あまたたび夢にみし人か

切（せち）になつかし

神無月（かみなづき）

岩手（いはて）の山の

初雪の眉（まゆ）にせまりし朝を思ひぬ

ひでり雨さらさら落ちて

前栽（せんざい）の

萩（はぎ）のすこしく乱（みだ）れたるかな

秋の空廓寥（くわくれう）として影もなし	あまりにさびし	烏（からす）など飛べ	雨後（うご）の月	ほどよく濡（ぬ）れし屋根瓦（やねがはら）	の	そのところどころ光るかなしさ	われ饑（う）ゑてある日に	細き尾を掉（ふ）りて	饑ゑて我を見る犬の面（つら）よし	いつしかに	泣くといふこと忘れたる	我泣かしむる人のあらじか	汪然（わうぜん）として	ああ酒のかなしみぞ我に来（きた）れる	立ちて舞（ま）ひなむ
---------------------	---------	------------	----------	----------------------	---	----------------	--------------	------------	------------------	-------	-------------	--------------	-------------	--------------------	------------

蟬（いとど）鳴（な）く

そのかたはらの石に踞（きよ）し

泣き笑ひしてひとり物言ふ

力なく病（や）みし頃（ころ）より

口すこし開（あ）きて眠（ねむ）るが

癖（くせ）となりనికి

人ひとり得（う）るに過ぎざる事をもて

大願（たいぐわん）とせし

若きあやまち

物怨（ゑん）ずる

そのやはらかき上目（うはめ）をば

愛（め）づとことさらつれなくせむや

かくばかり熱（あつ）き涙は

初恋の日にもありきと

泣く日またなし

長く長く忘れし友に

会ふごとき

よろこびをもて水の音聴（き）く

秋の夜の

鋼鉄（はがね）の色の大空に

火を噴（は）く山もあれなど思ふ

岩手山（いはてやま）

秋はふもとの三方（さんぱう）の

野に満つる虫を何（なに）と聴くらむ

父のごと秋はいかめし

母のごと秋はなつかし

家（いへ）持たぬ児（こ）に

秋来（く）れば

恋（こ）ふる心のいとまなさよ

夜（よ）もい寝（ね）がてに雁（かり）多く



聴く

長月（ながつき）も半（なか）ばになりぬ  
いつまでか

かくも幼く打出（うちい）でずあらむ

思ふてふこと言はぬ人の

おくり来（き）し

忘れな草（ぐさ）もいちじろかりし

秋の雨に逆反（さかぞ）りやすき弓（ゆみ）

のごと

このごろ

君のしたしまぬかな

松の風夜昼（よひる）ひびきぬ

人訪（と）はぬ山の祠（ほこら）の

石馬（いしうま）の耳に

ほのかなる朽木（くちき）の香（か）をり

そがなかの葦（たけ）の香りに  
秋やや深し

時雨（しぐれ）降るとき音して

木伝（こづた）ひぬ

人によく似し森の猿（さる）ども

森の奥

遠きひびきす

木（き）のうろに臼（うす）ひく侏儒（しゆ

じゆ）の国にかも来（き）し

世のはじめ

まづ森ありて

半神（はんしん）の人そが中に火や守りけむ

はてもなく砂うちつづく

戈壁（ゴビ）の野に住みたまふ神は

秋の神かも

あめつちに

わが悲しみと月光（げつくわう）と

あまねき秋の夜（よ）となれりけり

うらがなしき

夜（よる）の物の音（ね）洩（も）れ来（く  
るを

拾（ひろ）ふがごとくさまよひ行（ゆ）きぬ

旅の子の

ふるさとに来（き）て眠るがに

げに静かにも冬の来（き）しかな

忘れがたき人人

一

潮（しほ）かをる北の浜辺（はまべ）の

砂山のかの浜薔薇（はまなす）よ

今年も咲けるや

たのみつる年の若さを数（かぞ）へみて	指を見つめて	旅がいやになりき	三度（みたび）ほど	汽車の窓よりながめたる町の名なども	したしかりけり	函館（はこだて）の床屋（とこや）の弟子（	でし）を	おもひ出（い）でぬ	耳剃（そ）らせるがこころよかりし	わがあとを追ひ来（き）て	知れる人もなき	辺土（へんど）に住みし母と妻かな	船に酔（ゑ）ひてやさしくなれる	いもうとの眼（め）見ゆ
--------------------	--------	----------	-----------	-------------------	---------	----------------------	------	-----------	------------------	--------------	---------	------------------	-----------------	-------------

津軽（つがる）の海を思へば

目を閉（と）ぢて

傷心（しやうしん）の句を誦（ず）してゐし

友の手紙のおどけ悲しも

をさなき時

橋の欄干（らんかん）に糞（くそ）塗（ぬ）

りし

話も友はかなしみてしき

おそらくは生涯（しやうがい）妻をむかへじ

と

わらひし友よ

今もめとらず

あはれかの

眼鏡（めがね）の縁（ふち）をさびしげに光

らせてゐし

女教師よ

友われに飯（めし）を与へき	その友に背（そむ）きし我の	性（さが）のかなしさ	函館（はこだて）の青柳町（あをやなぎちや	う）こそかなしけれ	友の恋歌（こひうた）	矢ぐるまの花	ふるさとの	麦のかをりを懐（なつ）かしむ	女の眉（まゆ）にこころひかれき	あたらしき洋書の紙の	香（か）をかぎて	一途（いちづ）に金（かね）を欲（ほ）しと	思ひしが	しらなみの寄せて騒（さわ）げる
---------------	---------------	------------	----------------------	-----------	------------	--------	-------	----------------	-----------------	------------	----------	----------------------	------	-----------------



なかば忘れぬ

むやむやと

口の中（うち）にてたふとげの事を呟（つぶや）く

乞食（こじき）もありき

とるに足らぬ男と思へと言ふごとく

山に入（い）りにき

神のごとき友

巻煙草（まきたばこ）口にくはへて

浪（なみ）あらし

磯（いそ）の夜霧に立ちし女よ

演習のひまにわざわざ

汽車に乗りて

訪（と）ひ来（き）し友とのめる酒かな

大川（おほかは）の水の面（おもて）を見る



ごとに

郁雨（いくう）よ

君のなやみを思ふ

智慧（ちゑ）とその深き慈悲（じひ）とを

もちあぐみ

為（な）すこともなく友は遊べり

こころざし得（え）ぬ人人の

あつまりて酒のむ場所が

我が家なりしかな

かなしめば高く笑ひき

酒をもて

悶（もん）を解（げ）すといふ年上の友

若くして

数人（すにん）の父となりし友

子なきがごとく酔（ゑ）へばうたひき

さりげなき高き笑ひが

酒とともに

我が腸（はらわた）に沁（し）みにけらしな

哇呻（あくび） 嚙（か）み

夜汽車の窓に別れたる

別れが今は物足（ものた）らぬかな

雨に濡れし夜汽車の窓に

映（うつ）りたる

山間（やまあひ）の町のともしびの色

雨つよく降る夜の汽車の

たえまなく雫（しづく）流るる

窓硝子（まどガラス）かな

真夜中の

俱知安駅（くちあんえき）に下（お）りゆき

し

女の鬢（びん）の古き痕（きず）あと

札幌（さつぽろ）に

かの秋われの持てゆきし

しかして今も持てるかなしみ

アカシヤの街樾（なみき）にポプラに

秋の風

吹くがかなしと日記（にき）に残れり

しんとして幅広き街（まち）の

秋の夜の

玉蜀黍（たうもろこし）の焼くるにほひよ

わが宿の姉と妹（いもと）のいさかひに

初夜（しよや）過ぎゆきし

札幌の雨

石狩（いしかり）の美国（びくに）といへる

停車場の

柵（さく）に乾（ほ）してありし

赤き布片（きれ）かな

かなしきは小樽（をたる）の町よ

歌ふことなき人人の

声の荒さよ

泣くがごと首ふるはせて

手の相（さう）を見せよといひし

易者（えきしや）もありき

いささかの銭（ぜに）借（か）りてゆきし

わが友の

後姿（うしろすがた）の肩（かた）の雪かな

世わたりの拙（つたな）きことを

ひそかにも

誇（ほこ）りとしたる我にやはあらぬ

汝（な）が瘦（や）せしからだはすべて

謀叛気（むほんぎ）のかたまりなりと

いはれてしこと

かの年のかの新聞の

初雪の記事を書きしは

我なりしかな

椅子（いす）をもて我を撃（う）たむと身構

（みがま）へし

かの友の酔（ゑ）ひも

今は醒（さ）めつらむ

負けたるも我にてありき

あらそひの因（もと）も我なりしと

今は思へり

殴（なぐ）らむといふに

殴れとつめよせし

昔の私のいとほしきかな

汝（なれ）三度（みたび）



友共産を主義とせりけり

酒のめば鬼（おに）のごとくに青かりし

大いなる顔よ

かなしき顔よ

樺太（からふと）に入（い）りて

新しき宗教を創（はじ）めむといふ

友なりしかな

治（をさ）まれる世の事無（ことな）さに

飽（あ）きたりといひし頃こそ

かなしかりけれ

共同の薬屋開き

儲（まう）けむといふ友なりき

詐欺（さぎ）せしといふ

あをじろき頬（ほほ）に涙を光らせて

死をば語りき

若き商人（あきびと）

子を負（お）ひて

雪の吹き入（い）る停車場に

われ見送りし妻の眉（まゆ）かな

敵として憎みし友と

やや長く手をば握（にぎ）りき

わかれといふに

ゆるぎ出（い）づる汽車の窓より

人（ひと）先（さき）に顔を引きしも

負（ま）けざらむため

みぞれ降る

石狩（いしかり）の野の汽車に読みし

ツルゲエネフの物語かな

わが去れる後（のち）の噂（うはさ）を

おもひやる旅出（たびで）はかなし



死ににゆくごと

わかれ来（き）てふと瞬（またた）けば

ゆくりなく

つめたきものの頬をつたへり

忘れ来（き）し煙草（たばこ）を思ふ

ゆけどゆけど

山なほ遠き雪の野の汽車

うす紅（あか）く雪に流れて

入日影（いりひかげ）

曠野（あらの）の汽車の窓を照（てら）せり

腹すこし痛（いた）み出（い）でしを

しのびつつ

長路（ちやうろ）の汽車にのむ煙草（たばこ

かな

乗合（のりあひ）の砲兵士官（はうへいしく



あかつきの色

ごおと鳴る凧（こがらし）のあと

乾（かわ）きたる雪舞ひ立ちて

林を包（つつ）めり

空知川（そらちがは）雪に埋（うも）れて

鳥も見えず

岸边（きしべ）の林に人ひとりゐき

寂莫（せきばく）を敵とし友とし

雪のなかに

長き一生を送る人もあり

いたく汽車に疲れて猶（なほ）も

きれぎれに思ふは

我のいとしさなりき

うたふごと駅の名呼びし

柔和（にうわ）なる

若き駅夫（えきふ）の眼をも忘れず

雪のなか

処処（しよしよ）に屋根見えて

煙突（えんとつ）の煙（けむり）うすくも空  
にまよへり

遠くより

笛（ふえ）ながながとひびかせて

汽車今とある森林に入（い）る

何事も思ふことなく

日一日（ひいちにち）

汽車のひびきに心まかせぬ

さいはての駅に下（お）り立ち

雪あかり

さびしき町にあゆみ入（い）りにき

しらしらと氷かがやき



出（だ）しぬけの女の笑ひ  
身に沁（し）みき  
厨（くりや）に酒の凍（こほ）る真夜中  
わが酔（ゑ）ひに心いためて  
うたはざる女ありしが  
いかなれるや  
小奴（こやつこ）といひし女の  
やはらかき  
耳朶（みみたぼ）なども忘れがたかり  
よりそひて  
深夜（しんや）の雪の中に立つ  
女の右手（めて）のあたたかさかな  
死にたくはないかと言へば  
これ見よと  
咽喉（のんど）の痕（きず）を見せし女かな







さらさらと氷の屑（くづ）が

波に鳴る

磯の月夜のゆきかへりかな

死にしとかこのごろ聞きぬ

恋がたき

才（さい）あまりある男なりしが

十年（ととせ）まへに作りしといふ漢詩（か

らうた）を

酔（ゑ）へば唱（とな）へき

旅に老（お）いし友

吸ふごとに

鼻がぴたりと凍（こほ）りつく

寒き空気を吸ひたくなりぬ

波もなき二月の湾（わん）に

白塗（しろぬり）の

外国船が低く浮かべり

三味線（さみせん）の絃（いと）のきれしを

火事のごと騒ぐ子ありき

大雪の夜（よ）に

神のごと

遠く姿をあらはせる

阿寒（あかん）の山の雪のあけぼの

郷里（くに）にゐて

身投げせしことありといふ

女の三味（さみ）にうたへるゆふべ

葡萄色（えびいろ）の

古き手帳にのこりたる

かの会合（あひびき）の時と処（ところ）か

な

よごれたる足袋（たび）穿（は）く時の

気味（きみ）わるき思ひに似たる

思出（おもひで）もあり

わが室（へや）に女泣きしを

小説のなかの事かと

おもひ出（い）づる日

浪淘沙（らうたうさ）

ながくも声をふるはせて

うたふがごとき旅なりしかな

二

いつなりけむ

夢にふと聴（き）きてうれしかりし

その声もあはれ長く聴かざり

頬（ほ）の寒き

流離（りうり）の旅の人として

路（みち）問（と）ふほどのこと言ひしのみ

さりげなく言ひし言葉は  
さりげなく君も聴きつらむ  
それだけのこと  
ひややかに清き大理石（なめいし）に  
春の日の静かに照るは  
かかる思ひならむ  
世の中の明るさのみを吸ふごとき  
黒き瞳（ひとみ）の  
今も目にあり  
かの時に言ひそびれたる  
大切な言葉は今も  
胸にのけれど  
真白（ましろ）なるランプの笠（かさ）の  
瑕（きず）のごと  
流離の記憶消しがたきかな

ひ	忘		か	山	山		君	な	馬			物	鬢	人		今	こ	去	函		
よ	れ		な	を	の		も	れ	鈴			書	（	が		も	こ	り	館		
っ	を		し	思	子		こ	い	薯			く	）	い		も	ろ	し	（		
と	れ		き	ふ	の		の	し	（			時	）	ふ			こ	夜	は		
し	ば		時	が	の		花	よ	）			の	）	）			）	は	こ		
た			は	ご	の		を	）	）			君	）	）				こ	だ		
事			君	と	の		好	）	）			に	）	）				）	た		
が			を	く	の		き	）	）			見	）	）				）	て		
思			思	に	の		た	）	）			た	）	）				）	）		
ひ			へ	も	の		ま	）	）			り	）	）				）	）		
出			り	）	の		ふ	）	）			し	）	）				）	）		
の					の		ら	）	）				）	）				）	）		
種					の		む	）	）				）	）				）	）		
（					の			）	）				）	）				）	）		
た					の			）	）				）	）				）	）		
ね					の			）	）				）	）				）	）		
）					の			）	）				）	）				）	）		
に					の			）	）				）	）				）	）		
ま					の			）	）				）	）				）	）		
た					の			）	）				）	）				）	）		

なる

忘れかねつも

病（や）むと聞き

癒（い）えしと聞きて

四百里（しひやくり）のこなたに我はうつつ  
なかりし

君に似し姿を街（まち）に見る時の

こころ躍（をど）りを

あはれと思へ

かの声を最一度（もいちど）聴（き）かば  
すつきりと

胸や霽（は）れむと今朝（けさ）も思へる

いそがしき生活（くらし）のなかの

時折（ときおり）のこの物おもひ

誰（たれ）のためぞも

しみじみと

物うち語る友もあれ

君のことなど語り出（い）でなむ

死ぬまでに一度会はむと

言ひやらば

君もかすかにうなづくらむか

時として

君を思へば

安かりし心にはかに騒ぐかなしさ

わかれ来（き）て年（とし）を重ねて

年（とし）ごとに恋しくなれる

君にしあるかな

石狩（いしかり）の都（みやこ）の外の

君が家

林檎（りんご）の花の散りてやあらむ

長き文（ふみ）

三年（みとせ）のうち  
に三度（みたび）来（  
き）ぬ

我の書きしは四度（よたび）  
にかあらむ

手套を脱ぐ時

手套（てぶくろ）を脱（ぬ）  
ぐ手ふと休（や  
む

何やらむ

こころかすめし思ひ出のあり

いつしかに

情（じやう）をいつはること  
知りぬ

髭（ひげ）を立てしもその頃  
なりけむ

朝の湯の

湯槽（ゆぶね）のふちにうな  
じ載（の）せ  
ゆるく息（いき）する物思  
ひかな



夏来（く）れば

うがひ薬の

病（やまひ）ある齒に沁（し）む朝のうれし  
かりけり

つくづくと手をながめつつ

おもひ出（い）でぬ

キスが上手（じやうず）の女なりしが

さびしきは

色にしたしまぬ目のゆると

赤き花など買はせけるかな

新しき本を買ひ来て読む夜半（よは）の

そのたのしさも

長くわすれぬ

旅（たび）七日（な）のか

かへり来（き）ぬれば

わが窓の赤きインクの染（し）みもなつかし

古文書（こもんじよ）のなかに見いでし  
よごれたる  
吸取紙（すひとりがみ）をなつかしむかな  
手にためし雪の融（と）くるが  
ここちよく  
わが寐飽（ねあ）きたる心には沁（し）む  
薄れゆく障子（しやうじ）の日影（ひかげ）  
そを見つつ  
こころいつしか暗くなりゆく  
ひやひやと  
夜は薬の香（か）のにほふ  
医者が住みたるあとの家（いへ）かな  
窓硝子（まどガラス）  
塵（ちり）と雨とに曇（くも）りたる窓硝子  
にも

かなしみはあり

六年（むとせ）ほど日毎日毎（ひごとひごと）  
にかぶりたる

古き帽子も

棄（す）てられぬかな

こころよく

春のねむりをむさぼれる

目にやはらかき庭の草かな

赤煉瓦（あかれんぐわ）遠くつづける高塀（

たかべい）の

むらさきに見えて

春の日ながし

春の雪

銀座の裏の三階の煉瓦造（づくり）に

やはらかに降る

よごれたる煉瓦の壁に

降りて融（と）け降りては融くる

春の雪かな

目を病（や）める

若き女の倚（よ）りかかる

窓にしめやかに春の雨降る

あたらしき木のかをりなど

ただよへる

新開町（しんかいまち）の春の静けさ

春の街（まち）

見よげに書ける女名（をんなな）の

門札（かどふだ）などを読みありくかな

そことなく

蜜柑（みかん）の皮の焼くるごときにほひ残

りて

夕（ゆふべ）となりぬ

にぎはしき若き女の集会（あつまり）の

こゑ聴（き）き倦（う）みて

さびしくなりたり

何処（どこ）やらに

若き女の死ぬごとき悩（なや）ましさあり

春の霰（みぞれ）降る

コニヤツクの酔（ゑ）ひのあとなる

やはらかき

このかなしみのすずろなるかな

白き皿（さら）

拭（ふ）きては棚（たな）に重（かさ）ねる

酒場の隅（すみ）のかなしき女

乾きたる冬の大路（おほぢ）の

何処（いづく）やらむ

石炭酸（せきたんさん）のほひひそめり

赤赤（あかあか）と入日（いりひ）うつれる

河ばたの酒場の窓の

白き顔かな

新しきサラダの皿（さら）の

酔（す）のかをり

こころに沁（し）みてかなしき夕（ゆふべ）

空色（そらいろ）の罎（びん）より

山羊（やぎ）の乳をつぐ

手のふるひなどいとしかりけり

すがた見の

息（いき）のくもりに消されたる

酔（ゑ）ひうるみの眸（まみ）のかなしさ

ひとしきり静かになれる

ゆふぐれの

厨（くりや）にのこるハムのにほひかな

ひややかに罫（びん）のならべる棚（たな）

の前

齒（は）せせる女を

かなしとも見き

やや長きキスを交（かは）して別れ来（き）

し

深夜の街の

遠き火事かな

病院の窓のゆふべの

ほの白（じろ）き顔にありたる

淡（あは）き見覚（みおぼ）え

何時（いつ）なりしか

かの大川（おほかは）の遊船（いうせん）に

舞（ま）ひし女をおもひ出（で）にけり

用もなき文（ふみ）など長く書きさして  
ふと人こひし

街に出（で）てゆく

しめらへる煙草（たばこ）を吸へば

おほよその

わが思ふことも軽（かる）くしめれり

するどくも

夏の来（きた）るを感じつつ

雨後（うご）の小庭（こには）の土の香（か）  
を嗅（か）ぐ

すずしげに飾（かざ）り立てたる

硝子屋（ガラスや）の前にながめし

夏の夜の月

君来るといふに夙（と）く起き

白シャツの

袖（そで）のよごれを気にする日かな



おちつかぬ我が弟の  
このごろの  
眼のうるみなどかなしかりけり  
どこやらに杭（くひ）打つ音し  
大桶（おほをけ）をころがす音し  
雪ふりいでぬ  
人気（ひとけ）なき夜（よ）の事務室に  
けたたましく  
電話の鈴（りん）の鳴りて止みたり  
目さまして  
ややありて耳に入（い）り来（きた）る  
真夜中すぎの話声かな  
見てをれば時計とまれり  
吸はるるごと  
心はまたもさびしさに行（ゆ）く

朝朝（あさあさ）の

うがひの料（しろ）の水薬（するやく）の  
 罫（びん）がつめたき秋となりにけり

夷（なだら）かに麦の青める

丘の根の

小径（こみち）に赤き小櫛（をぐし）ひろへ  
 り

裏山の杉生（すぎふ）のなかに

斑（まだら）なる日影（ひかげ）這（は）ひ  
 入（い）る

秋のひるすぎ

港町

とろろと鳴きて輪を描く鳶（とび）を庄（あ  
 つ）せる

潮（しほ）ぐもりかな



手にとりて見る

ゆゑもなく海が見たくて

海に来ぬ

こころ傷（いた）みてたへがたき日に

たひらなる海につかれて

そむけたる

目をかきみだす赤き帯（おび）かな

今日逢（あ）ひし町の女の

どれもこれも

恋にやぶれて帰るとき日

汽車の旅

とある野中（のなか）の駐車場の

夏草の香（か）のなつかしかりき

朝まだき

やっと間（ま）に合（あ）ひし初秋（はつあ



残	手	売		秋	い	気		初	な		取		旅	若	壁		醉	か	白
る	垢	り		の	つ	に		秋	つ		り		の	き	(		(	な	き
	(	売		風	か	し		(	か		い		宿	女	か		ゑ	し	蓮
	て	り		吹	癒	き		は	か		で		屋	の	べ		ひ	み	沼
	あ	り		く	(	に		つ	し		し		の	を	ご		の	が	(
	か	て			な	ほ		あ	き		去		秋	き	し		あ		は
	)	り			ほ	り		き	)		年		の	く	に		ひ		す
	き				)	て		に	の		(		蚊	を	は		だ		ぬ
	た				り			ほ	朝		こ		帳	き	っ		に		ま
	な							ひ	の		ぞ		(	く	き		は		)
	き							身	の		の		か	を	り		は		に
	ド							に	の		裕		や	き	と		っ		咲
	イ							沁	痛		(		か	き	浮		き		く
	ツ							(	み		あ		な	り	く		り		ご
	語							し	な		は		な	と	と		と		と
	の							む	ど		せ		な	く	く		と		く
	辞										)		な	く			と		と
	書										の		な				と		と
	の												な				と		と
	み												な				と		と

夏の末かな

ゆゑもなく憎（にく）みし友と

いつしかに親しくなりて

秋の暮れゆく

赤紙（あかがみ）の表紙手擦（てず）れし

国禁（こくきん）の

書（ふみ）を行李（かうり）の底にさがす日

売ることを差し止（と）められし

本の著者に

路（みち）にて会へる秋の朝かな

今日よりは

我も酒など呷（あふ）らむと思へる日より

秋の風吹く

大海（だいかい）の

その片隅（かたすみ）につらなれる島島（し

まじまゝの上に

秋の風吹く

うるみたる目と

目の下の黒子（ほくろ）のみ

いつも目につく友の妻かな

いつ見ても

毛糸の玉をころがして

鞆（くつした）を編（あ）む女なりしが

葡萄色（えびいろ）の

長椅子（ながいす）の上に眠りたる猫ほの白

（じろ）き

秋のゆふぐれ

ほそぼそと

其処（そこ）ら此処（ここ）らに虫の鳴く

昼の野に来て読む手紙かな





ふべ

時ありて

猫のまねなどして笑ふ

三十路（みそぢ）の友のひとり住（ず）みか

な

気弱（きよわ）なる斥候（せきこう）のごと

く

おそれつつ

深夜の街を一人散歩す

皮膚（ひふ）がみな耳にてありき

しんとして眠れる街（まち）の

重き靴音

夜（よる）おそく停車場に入（い）り

立ち坐（すわ）り

やがて出（い）でゆきぬ帽（ぼう）なき男

遊	と	ち		青	舗	銀		東	帰	曠		あ	寄	め	若		な	し	気
ぶ	あ	よ		イ	石	行		京	り	野		と	り	と	(	な	つ	っ	が
を	る	ん		ン	(	の		の	来	(		な	て	と	も	く	と	と	つ
眺	小	ち		ク	し	窓		夜	(	あ		し	来	り	し	も	も	り	け
む	藪	よ		か	き	の		(	き	ら		あ	(	下	あ	も	街	と	ば
	(	ん		な	い	下		よ	ぬ	の		ら	く	霧	ら	を	を	と	い
	こ	と			し	な		を		の		る	る	下	さ	ま	と	り	ば
	や	よ			し	る		ひ		の		る		(	ま	よ	と	と	
	ぶ	ん			の			と		の		る		お	よ	へ	り	と	
	)	と			霜			り		の		る		り	へ	る	て	と	
	に				(			あ		の		る		り	か	な	居	と	
	頬				し			ゆ		の		る		り	な	る	(	と	
	白				も			み		の		る		り	な	る	を	と	
	(				)			て		の		る		り	な	る	を	と	
	ほ				に					の		る		り	な	る	を	と	
	ほ				こ					の		る		り	な	る	を	と	
	じ				ぼ					の		る		り	な	る	を	と	
	ろ				れ					の		る		り	な	る	を	と	
	)				し					の		る		り	な	る	を	と	
	の									の		る		り	な	る	を	と	

雪の野（や）の路（みち）

十月の朝の空気に

あたらしく

息吸（す）ひそめし赤坊（あかんぼ）のあり

十月の産病院の

しめりたる

長き廊下のゆきかへりかな

むらさきの袖（そで）垂（た）れて

空を見上げゐる支那（しな）人ありき

公園の午後

孩児（をさなご）の手ざはりのごとき

思ひあり

公園に来てひとり歩（あゆ）めば

ひさしぶりに公園に来て

友に会ひ

堅（かた）く手握り口疾（くちど）に語る

公園の木（こ）の間（ま）に

小鳥あそべるを

ながめてしばし憩（いこ）ひけるかな

晴れし日の公園に来て

あゆみつつ

わがこのごろの衰（おとろ）へを知る

思出のかのキスかとも

おどろきぬ

プラタヌの葉の散りて触（ふ）れしを

公園の隅（すみ）のベンチに

二度ばかり見かけし男

このごろ見えぬ

公園のかなしみよ

君の嫁（とつ）ぎてより

すでに七月（ななつき）来（き）しこともなし

公園のとある木蔭（こかげ）の捨椅子（すていす）に

思ひあまりて

身をば寄せたる

忘れぬ顔なりしかな

今日街（まち）に

捕吏（ほり）にひかれて笑（ゑ）める男は

マチ擦（す）れば

二尺ばかりの明るさの

中をよぎれる白き蛾（が）のあり

目をとちて

口笛かすかに吹きてみぬ

寐（ね）られぬ夜の窓にもたれて



吸ひてわが児の死にゆきしかな

死にし児の

胸に注射の針を刺す

医者の手もとにあつまる心

底知れぬ謎（なぞ）に対（むか）ひてあるご

とし

死児（しじ）のひたひに

またも手をやる

かなしみのつよくいたらぬ

さびしさよ

わが児のからだ冷（ひ）えてゆけども

かなしくも

夜（よ）明（あ）くるまでは残りゐぬ

息（いき）きれし児の肌（はだ）のぬくもり





校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

●表記について

このファイルは W3C 勧告 XHTML 1.1 にそった形式で作成されています。

「#」は、入力者による注を表す記号です。

「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。